

博物館研究班「本山コレクション貝塚研究班」 研究成果報告（2023年度）

井上主税 関西大学文学部教授（研究代表者）

山下大輔 関西大学博物館学芸員

1. はじめに

2020年10月より始動した「本山コレクション貝塚班」は、研究活動の最終年度となる本年度に展示会を開催し、これまで4カ年にわたる研究成果を報告した。以下、展示会の内容をまとめる。なお、昨年度から非常勤研究員として本研究班に参画している山口卓也氏は、改めて博物館運営委員会での審議・了承を得た後、本年度も引き続き非常勤研究員として調査・研究にあたった。

2. 「本山コレクションにみる縄文時代の貝塚」

今年度は、引き続き岡山県笠岡市所在の津雲貝塚出土の石器や貝製品等を対象とし、調査を行うとともに、報告展示会の開催に向けた準備を行った。本研究班の成果報告展示会として2024年1月15日（月）から2月29日（木）まで、「本山コレクションにみる縄文時代の貝塚」展を開催した。この展示会では、2020年から2023年まで4カ年にわたる本山コレクション貝塚研究班の調査・研究成果を報告し、本山コレクションにみられる貝塚出土資料の再評価を行うものである。本展は以下のとおり3つの章で構成し、これまでの研究活動の内容について、主な資料を展示することで成果報告とした。

第1章 津雲貝塚の調査と瀬戸内の貝塚

本章では、岡山県笠岡市西大島に所在する津雲貝塚出土資料を中心に、その出土資料の中でも



写真1 「本山コレクションにみる縄文時代の貝塚」展
（左：特別展示室入口 右：展示状況）

主だった資料を展示した。津雲貝塚は、大正時代に繰り返し発掘調査が行われ、これまで約170体を超える人骨が出土したことで有名な貝塚である。ここで、人骨に装着された状態で貝製の腕輪が出土したり、人骨の周辺から鹿角製の玦状耳飾が出土したりするなど豊富な副葬品をみることができる。本展でも乳児骨を埋葬した縄文時代晩期の甕棺や人骨の頭蓋を覆う土器片等を展示し、津雲貝塚でみられる縄文時代の多様な埋葬形態を紹介した。これらの土器以外にも、石器や未成品を含む多数の貝輪など豊富な出土品を展示した。

この他にも、彦崎貝塚や里木貝塚など縄文土器型式の標式遺跡であり瀬戸内地域を代表する貝塚資料も展示・公開した。



写真2 「第1章 津雲貝塚の調査と瀬戸内の貝塚」展示状況

(上段左：津雲貝塚出土土器・土偶 上段右：津雲貝塚出土貝輪・石器
下段左：津雲貝塚出土鹿角製玦状耳飾 下段右：彦崎貝塚・里木貝塚出土資料)

第2章 北関東の貝塚

茨城県の南東部に位置する霞ヶ浦は、琵琶湖に次ぐ日本第2の湖として知られている。この霞ヶ浦周辺には、縄文時代に多くの貝塚が形成されており、特に霞ヶ浦南西岸には明治時代からその存在が知られる著名な貝塚が点在している。このうち、本山コレクションには「椎塚貝塚」と「福田貝塚」から出土した資料が含まれている。



写真3 「第2章 北関東の貝塚」展示状況
(椎塚貝塚・福田貝塚出土資料)

椎塚貝塚は、茨城県稲敷市（旧江戸崎町）に所在し、古くから東京人類学会などによって発掘調査が実施され、遺物が採集されている。出土遺物は土器以外にも土偶などの土製品や石器、骨角器などが知られている。1918（大正7）年には本山彦一自らが当貝塚の調査を実施しており、土偶などを採集している。椎塚貝塚出土資料には大量の土器があるが、本展では代表的な土器資料と土偶を中心に報告した。

福田貝塚も稲敷市（旧東町）に位置し、明治時代以降多くの学者に注目され、発掘調査が行われた。その成果は、『東京人類學會雑誌』などで報告されているが、あくまでも遺物採集の色合いが濃く、優品・名品紹介のようなものであった。本展では、福田貝塚出土として著名な山形土偶やミミズク土偶を紹介した。

第3章 北と南の縄文遺跡と貝塚

本山コレクションには、東北地方、特に三陸海岸に点在する貝塚出土資料が数多く含まれている。1920（大正9）年には、本山彦一自らが岩手県大船渡市所在の大船渡貝塚、細浦（山ノ上）貝塚、吉浜村根白、陸前高田市瀬沢貝塚など三陸の貝塚群の調査を行っている。

これ以外にも本州北端の青森県からは、貝塚出土資料ではないものの、八戸市所在是川石器時代遺跡出土資料が当コレクションに含まれている。是川石器時代遺跡は、2021年にユネスコ世界文化遺産に登録された「北海道・北東北の縄文遺跡群」の構成資産の一つで、本資料は、本山彦一が是川遺跡の消滅を危惧してその碑を建立し、揮毫したことに感謝した地元の考古学者泉山岩次郎から送られたものといわれている。展示会では、是川中居遺跡出土の糞化石や今回の整理作業で全体の器形が判明した、縄文時代中期の円筒上層式土器等を展示した。

一方、本山の資料収集範囲は縄文遺跡や貝塚が多数存在する東・北日本だけでなく、日本列島の南部、九州地方にも及んでいる。特に、本山の故郷である熊本県からは多くの資料を収集している。これらの資料には、九州地方の縄文土器型式の標式遺跡である御領貝塚や轟貝塚など、考古学史的にみても重要な資料が多数含まれている。本展では、九州の縄文時代後期土器の標式遺跡である御領貝塚出土資料をその一例として公開した。



写真4 「第3章 北と南の縄文遺跡と貝塚」
展示状況

（上・中段：是川中居遺跡出土資料
下段：御領貝塚出土資料）

3. 本山コレクション貝塚資料研究の意義

1877（明治10）年に、アメリカの動物学者エドワード・S・モースによって東京都品川区大井に所在する大森貝塚の発掘が行われた。この調査は日本で初めての科学的な発掘調査と評価でき、その後、日本各地で貝塚の調査が実施され、出土土器の差異や埋葬人骨のあり方を分析することで日本人の起源に関する議論が盛んになった。埋葬人骨の出土を期待できる貝塚の調査は、日本列島における人種やその起源に関して多くの情報を提供してくれることは言うまでもない。それに加え、通常は残りにくい動物や魚の骨、それらで作られた道具や装飾品が遺存することが多く、縄文時代の生活や文化を復元する際の手助けとなり得る。

今回の報告展示会でみたように、本山コレクションの中にも貝塚から出土した骨や貝、鹿角などで作られた装飾品が多数含まれている。このような装飾品以外にも、それぞれの地域・時期に特徴的な土器や石器などの日常的な道具も収集されており、特定の遺物に偏ることなくコレクションが形成されていることが分かる。土偶や装飾品などの精神文化を示すような遺物だけでなく、当時の人々が日常的に使用していた土器や石器をはじめとする多種多様な遺物を見ることができ、本山コレクション貝塚資料の一つの特徴といえる。このような出土遺物が多岐にわたる貝塚資料を調査・研究することで、縄文時代の人々の生活や文化を多角的な視点によって追及することが可能となる。

4. おわりに

本山コレクションは約2万点もの考古資料から成り、2011年に一括して国の登録有形文化財に登録された。当コレクションに含まれる資料の中には、残念ながら出土遺跡やその来歴が不明なものも含まれているが、貝塚関連資料については、津雲貝塚や三陸の貝塚群など、本山彦一が実際に発掘調査や踏査に関わることで入手した資料が多い。正式な発掘調査報告書等、当時の発掘の様子が分かる資料が存在しないものが多いものの、個別遺物としての評価のみならず、遺跡とそこから出土した遺物として一体的に評価が可能となる点で、当コレクションの中でも考古学的資料価値が高い資料群であるといえる。さらに、今回の調査・研究で確認されたように、本山コレクションは特定の考古遺物を対象として収集されたものではなく、多種多様な資料が含まれている。今後は、貝塚出土資料だけでなく、それ以外の資料にも焦点を当て、同様の調査・研究を継続して行っていきたい。

（文責：1章 井上、2・3章 山下、4章 井上・山下）